アンドレ・ブルトンのシュルレアリスム とアレクサンドル・コジェーヴのヘーゲル

加藤　彰彦

Ⅰ．ブルトンの中のヘーゲル

アンドレ・ブルトンの『失われた足跡』の中の「全てを解放せよ」には、次のような件がある。「今日では、人々は、全てのものがその反対のものに沈殿する、そして二つとも唯一の範疇に溶解する、つまり唯一の範疇とはそれ自体最初の項と両立し得ていて、このように精神が絶対的観念に到達するというところまで続くという、全ての対立を両立させ、全ての範疇を統一するという思想を手に入れている」（PI p.262）

1922年４月１日に発表されたということから考えれば、ダダと決別し、それ以後のシュルレアリスムの思想的基盤としてこのヘーゲルの弁証法があったことは充分に認められる。事実、それ以後に書かれた『シュルレアリスム宣言』並びに『シュルレアリスム第二宣言』には、ヘーゲルの弁証法の影響の下に書かれたと解することのできる箇所がある。まず、『シュルレアリスム宣言』においては、まさにシュルレアリスムの中心概念の一つである超現実の定義とも言える件がそれである。つまり「見かけは夢と現実ということで、非常に相反したこれらの二つの状態が、一種の絶対的現実、仮にこんな風に言うことができるとするなら、超現実（下線原文）に溶解することを私は信じている」（PI p.319）

また『シュルレアリスム第二宣言』には、次のように書かれている。「あらゆる点から見て、生と死、現実と想像、過去と未来、伝達可能と伝達不可能、高い所と低い所が、そこからは相対立して感じ取られることをやめる精神のある一点が存在すると考えざるを得ない。ところで、この点の確定の期待とは別の動機をシュルレアリスム的活動に探し求める

のは、無駄だろう」（PI p.781）

このような考え方は、シュルレアリスムの詩法とも言うべき考え方にも示されている。『通底器』の中には、次のように説明されている。「可能な限り互いに隔たった二つの物を比較すること、あるいは、全く別の方法によって唐突でかつはっとするようなやり方でそれらを対峙させることは、詩が切望し得る最も高い務めであり続けている。その点において引き合わせられた二つの言葉の具体的なまとまりを顕現させること、そしてそれがどんなものであろうとも、切り離して捉えられていた限りでは欠けていた力強さをそれぞれに伝えることである、詩の比類のない独自の力は徐々に発揮することを目指さなければならない。打ち砕くことが問題なのは、これらの二つの言葉の全く形式的な対立であって、打ち勝つことが問題なのは、人々が自然や時空間の外在性について抱く不完全で幼稚な観念にしか起因していないそれらの見かけ上の不均衡に関してである。媒介なしの相違の要素が強く思われれば思われる程、それは克服され否定されなければならない。検討の対象になっているのは、全くその物の意味なのである。このように互いにこすられた二つの異なった物体は、火花によって火の中で至上の一体性に到達するのである。例えば鉄と水は血の中において、共有した見事な溶解にたどり着くのであるといったようなことなどだ」（PⅡ p.181）

1932年に発表されたこの『通底器』の題名については、既に1928年に発表された『シュルレアリスムと絵画』において次のようにその意味が書かれている。「私が愛する全てのもの、私が考えそして感じる全てのものが、私を内在性に関する一つの特殊な哲学へと導く。それによれば、超現実は現実そのものの中に含まれ、現実に対して上位でもまた外部でもないだろう。そしてそれは逆も言えるのであって、何故なら含むものは同時に含まれるものだろうからである。問題となるのは、ほとんど含むものと含まれるものとの間の通底器であるだろう」（SP p.46）

表面的に矛盾した表現が矛盾と感じられずに受け入れられるためには、ヘーゲルの弁証法という観念操作が必要であり、これは何も我々の勝手な推測ではなく、ブルトン自身が明らかにしているものである。またフェルディナン・アルキエも『シュルレアリスムの哲学』において、次のように書いている。「確かにブルトンは幾度もヘーゲルに対する賛美を明言した。そして恐らく弁証法的な総合や矛盾したものの同一性に関するヘーゲルの公式の多くは、彼の心を捕らえることができたし、彼にとって彼自身の詩的要請を表現しているように見える」(PS p.41)

実際ブルトンは、例えば『シュルレアリスム第二宣言』においては次のように書いている。「シュルレアリスムは、もし現実と非現実、理性と無分別、内省と衝動、学識と＜致命的＞無知、有益と無益などの概念の訴訟に取り掛かるというやり方にとりわけ立ち入るとするなら、史的唯物論とともに、少なくともシュルレアリスムがヘーゲル体系の＜巨大な流産＞から始まっているというこの傾向の類似を示している。否定に、そして否定の否定に対して決定的に柔軟になった思考の行為に、限界、例えば経済的枠といった限界を割り当てることは、私には不可能に思われる。弁証法的方法は社会的問題の解決にしか有効に適用され得ないということを、どのようにして認めるのか。シュルレアリスムの全ての望みとは、最も直接的な意識の領域において、少しも競合することのない適用の可能性をそれに提供することである」(PI p.793)

またブルトンは『対話集』において、次のように述べている。「いかなる専門家もヘーゲルに関する注釈ということでは私に教えることはないだろうが、私がヘーゲルを知って以来、更に私の哲学の教師であり実証主義者であるアンドレ・クレッソンが、1912年頃、絶えず口にしていた皮肉を通してヘーゲルのことを気にして以来、私が彼の考え方を吸収したということ、そして私にとって彼の方法は他の全てを貧弱なものにしてしまったということは、それでも尚真実である。ヘーゲル的弁証法が

機能していないところでは、私にとって思想もなければ真理への希望も存在しない」（PⅢ p.525）

このようにブルトンのシュルレアリスムにおいてヘーゲルの弁証法が有効に作用していることは、特にシュルレアリスムの中心概念である超現実や詩法において明らかであり、またそれに限らずともシュルレアリスム全般に認められると言えるとともに、ブルトン自身がこのことに自覚的であったということは、まず前提として確認しておきたい。

Ⅱ．コジェーヴによるヘーゲル

ヴァンサン・デコンブによれば、現代フランス哲学におけるヘーゲルの影響について、アレクサンドル・コジェーヴの果たした役割には大きなものがある。20世紀初め、フランスにおいてヘーゲルがよく読まれているという状況ではなかったようである。ところがロシア革命が起こったこととともう一つ、アレクサンドル・コジェーヴがアレクサンドル・コイレの後任として1933年から高等研究学院で行なったヘーゲルについての講義がヘーゲルをよみがえらせる。コジェーヴによるヘーゲルの講義は数多くの人々に影響を与えたことが、証言により明らかにされている。ドミニック・オフレの『アレクサンドル・コジェーヴ　哲学、国家、歴史の終焉』によれば、ジョルジュ・バタイユはコジェーヴの熱心な聴講生であり、その思想に大きな影響を受けている。また例えば、コジェーヴによる『ヘーゲル読解入門』のある部分は、彼自身聴講生でもあったサルトルの『存在と無』の一節を容易に想起させることができる程である。そしてこのコジェーヴによるヘーゲルの講義の聴講生の中にアンドレ・ブルトンがいたことが明らかになっている。あまり熱心な聴講生ではなかったようだが、時折顔を見せていたということである。これらのことからブルトンによって捉えられたヘーゲルとはコジェーヴ経由のものであると短絡的に考えてしまうところだが、そもそもコジェーヴがコ

イレの後任として高等研究学院でヘーゲルを講義するのが1933年なのであるから、『対話集』において示されているように1912年にヘーゲルを知ったということ、またテキストとしては1922年の段階でヘーゲルの思想に言及しているブルトンにコジェーヴの影響を見て取ることはできない。同じく聴講生であったバタイユがコイレの講義に出席し始めるのも、1931年の11月になってからのことである。ただコジェーヴがブルトンと知り合うのはこれより前のことで、コジェーヴがコイレに導かれて高等研究学院の講義に出席するとともに、ソルボンヌで講義を聴いているのだが、この時にブルトン、アロン、バタイユなどと知り合ったということらしい。これが1927年頃のことと思われるのだが、それでも1922年から見ればずっと後のことになるわけである。ドミニック・オフレは、シュルレアリスムがヘーゲルの影響を受けているのは、コジェーヴの講義をブルトンが聴いていたからだとしているが、これはある意味で正しく、ある意味で奇妙なことかもしれない。というのも、ブルトンにおけるヘーゲルとは、既にコジェーヴ以前において確立しているからである。ただその場合のヘーゲルとは、いわゆる弁証法的な思考についてであって、それ以外の面でヘーゲルの思想の影響が見て取れるのではないか。そしてその場合、問題となっているヘーゲルとは他ならぬコジェーヴによってもたらされたヘーゲルであろうというのが、本論考における出発点とも言うべき立場である。コジェーヴが高等研究学院でヘーゲルを講義したのが1933年から39年までの６年間で、この講義内容が聴講生の一人であり、一時シュルレアリスム運動に参加していたレーモン・クノーによって整理され、1947年に公刊されている。本論考においては、このコジェーヴによる『ヘーゲル読解入門』を元にして、そこにシュルレアリスムを主導したブルトンに影響を与えたのではないかという思想を読み取り、実際にブルトンのテキストにおいてそれを当てはめて解読していくことを目的とする。

III．コジェーヴ解読

アレクサンドル・コジェーヴのテキストとしてはその全体像がはっきりせず、また後年官僚としての仕事に携わったということもあり、経済に関するものも存在するわけであるが、ブルトンとの関係、またその発表された時期といったことを考慮に入れ、『ヘーゲル読解入門』のみを対象とした。これはフランスの知識人たちに大きな影響を与えたのが、1933年から高等研究学院で行なわれたヘーゲルについての講義であるということから、その講義内容をまとめた『ヘーゲル読解入門』が考察の対象とするに適当であると考えたわけである。事実第二次世界大戦が勃発するとともに、ヘーゲルの講義を終了し、この後は官僚として活躍するわけであるから、ヘーゲルの思想の影響についての論考を深めることを目的とするなら、まず本書を中心にして論を進めていくべきであろうと思われる。この『ヘーゲル読解入門』においてまず注目すべきは、いわゆるヘーゲルの弁証法について意外な程言及されていず、むしろ歴史あるいは歴史の終わりについての解釈が示されているということである。コジェーヴは次のようにまとめている。「そして――結論を先に言うなら――［存在］の全体（下線原文）を明らかにする絶対（下線原文）［知］は、従って［人間］によって創造された最後の（下線原文）［世界］において、［歴史］の終局（下線原文）においてしか実現し得ないのである」（IH p.162）

この点については、コジェーヴ自身ヘーゲルを引用している。「［真実］とは自分自身の生成であり、目的としての終着点を前提とし、始まりとしてそれを持ち、実現しつつある発展によってそして終着点によってしか客観的現実にならない循環である」（IH pp.530-531）

更にコジェーヴの解説を付け加えるならば、「＜［精神］が自分自身になる＞、そしてそれが現実の適切な暴露である＜真実を獲得する＞と言うことができるのは、その時（＝歴史の終着点）なのである」（IH p.549）

つまり真なるものを認識するためには、あるいは真なるものを認識し

たと諒解するためには、あることが終わったという地点に立ち、そこから過去を振り返り、全てをその終局に結び付けるが如くまとめることができなければならない。従って、ここにおいて重要になってくるのが、何かが終わったという認識である。歴史の終わりと言うと、何かが消滅したというような喪失感があるが、これはむしろ歴史の目的もしくは終着点という風に表現した方が分かりやすいだろう。例えばコジェーヴは次のように説明する。「私の周辺で起こっていたことを観察することによって、そしてイエナの戦いの後で世界に起こったことをよく考えることによって、私はヘーゲルがこの戦いに厳密な意味での［歴史］の終局を見るのはもっともだと理解した。この戦いにおいてとともにこの戦いによって、人類の最先端は事実上終着点であり目的、つまり［人間］の歴史的進化の終局（下線原文）に到達したのである。その後起こったことは、ロベスピエール－ナポレオンによってフランスにおいて実現された全世界的な革命の力の空間における拡張でしかなかった。真の歴史的観点から見ると、二つの世界大戦はそれに伴う大小様々な革命とともに、結果として（実質的であれ潜在的であれ）最も進歩したヨーロッパの歴史的位置に周辺地方の遅れた文明を同調させただけであった」（IH p.436）

仮にヨーロッパの統一という目的からナポレオンの様々な戦いを評価するなら、ナポレオンの出現という到達点に向かって全ては解釈されるわけであり、フランス革命もその観点から解釈され評価されるというわけである。もちろんナポレオンのその後のことを考え併せてみるならば、決してそれが到達点にはなり得ないということが判明するわけであるから、再度到達点を設定し直さなければならないが、いずれにせよ目的となるべき到達点が設定されてから、その上で過去を振り返ることにより歴史が書かれることになるわけであるから、目的となる到達点が設定されるのが前提条件なのである。それでは何を到達点として設定するのかというのが問題となってくる。そもそも現状、つまり生活していく上に

あたって所与として提示されている現実に満足していないのであるから、現実の否定ということが当然生まれ出てくることから、その否定の行き着く先というものが到達点として考えられることになる。この点について、コジェーヴは次のように説明する。「ところで――我々が見てきたことであるし、更に見ることになるわけだが――ヘーゲルの人間学の深遠な根本は、［人間］は［空間］の中で自分自身との永遠の同一性において<u>ある</u>（下線原文）［存在］ではなく、この［存在］の<u>否定</u>（下線原文）によって――いまだ<u>存在せず</u>（下線原文）今尚無である観念や理想から出発して、所与の否定や変換によって――［闘争］と［労働］の［<u>行為</u>］（下線原文）と呼ばれる否定によって、空間的［存在］の中において［時間］として<u>無化する</u>（下線原文）［無］であるというこの考えによって形成されている」（IH p.175）

つまりここにおいて明言されていないが、人とは自分自身の欲望やそれなりの思考に基づいて、現状を改革もしくは自分にとって都合のいい状況に変化させようと努力するわけであるが、結局のところ死に至る存在というわけである。自ら果たした努力の結果もしくは偶然の為せる業から現状が改善されるということはあるかもしれないが、死から逃れることはできない。あるいは敢えて死と言わなくても、現状は死によって崩壊してしまう程脆いものであり、仮に現状に満足していても、それが永遠に続く絶対的なものでないことは明らかである。また現状に満足していなければ、その改善の望みが断たれることでもある。これにどう対応するか。まず現状の改善を放棄した場合の意識の在り方を、ヘーゲルを引用してコジェーヴは次のように説明する。「次に、<u>不幸な</u>（下線原文）［意識］の具体的様相において完成し完了していた［<u>自己意識</u>］（下線原文）は再び物象化された客観性に到達するために様々な努力をするが、それに手が届くことはない［精神］の苦悩にすぎなかったわけである。従って、個々の［自己意識］とその［自己意識］が赴くところである不

変の［本質的現実］（下線原文）の結び付きは、この自己意識の向こう側にあり続ける」（IH p.204）

このヘーゲルの言葉に続けて、「実際、他者（下線原文）によって、全ての（下線原文）他者によってそれを認めさせるのでなければ、実現する（下線原文）、自分の理想を客観化するとは何なのか。言い換えれば、それは［個体性］（下線原文）、［特殊］と［普遍］の総合を実現することなのである。（中略）［人間］は自分を客観化したいが故に［神］を思い描く。そして［世界］において自分を客観化できないが故に超越的な（下線原文）［神］を思い描く。しかし超越的な（下線原文）［神］との結び付きによって［個体性］を実現したいと思うことは、超越的なものにおいて、つまり［世界］と［世界］において生きる者として捉えられた自分自身の［向こう側］（下線原文）において、それを実現するということである。これは従って、現世で理想の実現を諦めることである。これはそれ故、この［世界］において不幸（下線原文）であり、自分がそうであると知ることである」（IH p.204）

このような「［意識］の不幸、不足の気持ちを取り除くこと」（IH p.205）は「［人間］が本当に＜満足する＞であろう現実［世界］の実現によってとか、抽象的行為によって超越性を取り除いたり現実に理想を適合させたりして、そうすることができる」（IH p.205）とコジェーヴは説明する。

しかしこれは安易な現状肯定であろうと思われる。不幸に生きる人間に対置して、知識人を捉えてコジェーヴは次のように説明する。「知識人の存在は、それらのみが［世界］を実際に変革できる［労働］と［闘争］の努力によって＜媒介されて＞いないが故に、＜直接的＞である。［知識人］は＜即時の＞現実において存在する、あるいはより正確には自分を探し求める。つまり彼が＜満足＞したいのは死後でもないし、彼岸においてでもないのである。彼は今ここで（下線原文）そうありたいと思うのだ。彼は従って修道者的ではない。超越の思考と気持ちは、不幸の気

持ちと同様に彼には欠けているのだ。／しかしながら、彼は真に＜満足＞しているわけではない。そしてこれは、まさしく彼の態度の＜直接性＞のためである。彼は［世界］をあるがままにしておき、それを＜享受＞することで満足するのである。（中略）ところで、もし与えられた（下線原文）現実の過小評価が修道者的態度を特徴付けるとするなら、所与（下線原文）の肯定的な評価は芸術家的態度にとって典型的である。与えられた（下線原文）［世界］は［悪］と見なされるのをやめるなら、［美］としか見なされざるを得ない。［知識人］は従ってせいぜいが、成功した革命家の本当の満足とは全く別のものである、何もしないで平和を好む芸術家の純粋な喜びに到達することができるだけである」（IH pp.205-206）

つまり理想を高く持つが故に超越的なものを設定しつつも、安易な現状維持に陥ることなく、あくまで到達点としては現実において達成されるものを設定すべきなのである。そしてその到達点が現実において可能になった時点で、それまでの事柄がその到達点に収束するべく全てまとめられるというわけである。それならば未来はどうなるのであろうか。恐らくは別の到達点が設定されるとともに、その到達点は超越的なものと深く関わり合い、容易には達成することができないものになるはずである。

Ⅳ．ブルトンのテキストとしての『ナジャ』

ブルトンの文献目録一覧を見てみるなら、主なものとして『シュルレアリスム宣言』が1924年、『失われた足跡』が1924年、『シュルレアリスムと絵画』が1928年、『ナジャ』が1928年、『シュルレアリスム第二宣言』が1930年、『通底器』が1932年、『シュルレアリスムとは何か』が1934年、『黎明』が1934年、『シュルレアリスムの政治的位置』が1935年、『狂気の愛』が1937年、『黒いユーモア選集』が1940年、『秘法17番』が1945年、

『対話集』が1952年、『ナジャ』の決定版が1963年となっている。コジェーヴに出会ったのが1927年頃、コジェーヴが高等研究学院でヘーゲルの講義をしていたのが1933年から39年までということを考えると、まずシュルレアリスムについての現状分析もしくは回顧的なものが1934年、1935年に出ているのは興味深い。まさにシュルレアリスムというものがとりあえずは確立されその活動が完成したというのではなくても、それまで存在しなかったシュルレアリスムという立場が成立するに至る経過について書かれるとするならば、それはまさに歴史なのである。またシュルレアリスムの登場に至る文学史という観点から捉えてみるならば、1940年の『黒いユーモア選集』も一つの歴史として捉え得るだろう。シュルレアリスムという現在から過去を分析解釈するわけである。ちなみに未来はかなり超越的なものとして捉えざるを得ない。例えばブルトンは『シュルレアリスム宣言』において超現実の定義めいたことを書いた上で、次のように書いているのだ。「私が向かうのはその獲得にであり、そこに到達しないのは確信しているが、あまり私の死のことを気にしていないので、このような所有の喜びを少しは推し測らないわけにはいかないのだ」(PI p.319)

これとは逆に、ブルトンがシュルレアリスムを歴史の終着点として過去に目を向けるならば、シュルレアリスムに結び付くものとして多くのものをエクリチュールの対象とすることができたであろう。例えばシュルレアリスムの一つの重要な概念として不可思議があるが、これについてブルトンは『シュルレアリスム宣言』において次のように書いている。「不可思議はあらゆる時代において同じというわけではない。それは人知れずその細部のみが我々に到達する一種の漠然とした新発見といった性質を帯びている。それはロマン派の廃墟(下線原文)や現代的なマネキン人形(下線原文)あるいはある時代を通じて人間の感受性を動かすのに適した全く別の象徴である」(PI p.321)

つまりいかにもシュルレアリスムという風に前面に全てが押し出されるのではなく、細部に注目することによって成立するものであるわけだ。これはブルトンが『シュルレアリスム宣言』において、過去の人物をある一面で捉えてシュルレアリストであると定義付けていることとも同様である。つまりブルトンが言うように、「私はこのことを強調しておくが、彼らのそれぞれには彼らが固執していた――非常に無邪気にだ！――いくつかの先入見を私が見抜いているという意味で、彼らはいつもシュルレアリストであるということではないのだ」（PI p.329）から、シュルレアリスムを実践しているとは言えないが、シュルレアリスムという終着点に向かって存在し得たということから、従来の文学史とは別のもう一つの文学史を成立させることができるわけである。しかしこれは一旦書いてしまえば、もうそれで終わりということではないだろうか。つまりそれは犯人がわかってしまった推理小説のようなものなのである。我々は犯人が誰かということを知りたいという知的欲望に駆り立てられて推理小説を読み進むのであるが、犯人がわかったその結末において、それまでの全ての事柄は犯人を犯人として認識するということに収束されてしまうわけである。このように考えるならば、シュルレアリスムが成立するという歴史は、いかに正統的文学史とは違った形で存在するとしても、それとして提示されれば、そしてそれが説得力を持つものであればそれだけ、初めからそうなるように決まっていたという風に捉えられるわけである。従ってこのような歴史は書かれるべきではあるが、恐らくは細部の変更を除いては書き直されることのないものになるはずである。こうなると、シュルレアリスム活動は未来に向かう他はなくなる。ところが、その未来に向かうシュルレアリスムの活動はともすれば超越的であり、現実の否定を標榜せざるを得ない。ブルトンは『シュルレアリスム宣言』の最後において次のように書いている。「私が考えているようなシュルレアリスムは、現実世界の訴訟で、弁護側の証人として召喚する

ことが問題になり得ない程充分に、我々の絶対的非順応主義（下線原文）を表明する」（PI p.346）

これはただ単に現実の変革に向かうだけではなく、言葉をシュルレアリスム的に使用することによってシュルレアリスムの詩法を打ち立てるかの如く、ある手法でシュルレアリスムの世界を現出せしめようとするわけである。しかしこれをもってしても、目的の達成ということは容易ではないのだ。ブルトンは『シュルレアリスム宣言』において、次のように書いているのだ。「詩的想像力の源泉にさかのぼり、そしておまけにそこにいることが必要だった。それは私がしてしまったと言うつもりはないことである。全ては最初うまく事が運ばないように見えるこの人里離れた地域に居を定めたいと思うには、ましてやそこに誰かを連れて行きたいと思うには、多くの責任を引き受けなければならない。とはいえ完全にそこにいると確信しているわけでは決してないのだ。どうせ気に入らないのなら、他の所で立ち止まる気にも同じようになる。とにかく矢印は今これらの国の方向を指し示していて、本当の目的の達成は最早旅行者の忍耐力次第でしかないのだ」（PI pp.322-323）

つまりブルトンはシュルレアリスムに至る歴史を書いてしまえば、後は未来における目的の達成に向かって、常に現実に対して超越的でなければならないのである。もちろん、『シュルレアリスム宣言』においても示されているように、ブルトンにその覚悟があるということは当然のことである。しかしこれでは現実に存在しつつ、かつシュルレアリスムに至る歴史のように一回書いてしまえばそれで終わりというのではなく、繰り返し語ることを可能にする歴史を書く喜びに浸ることはできないことになってしまう。確かにシュルレアリストたるもの常に現実に対して超越的であり、決して現実において安住しようとしてはならないという考えも首肯し得るところである。しかし自動記述をまさにシュルレアリスムであるとして提示し、「言語はシュルレアリスム的用法をするために

人間に与えられたのだ」（PI p.334）とするブルトンにとって、エクリチュールは単なる手段ではなく生きることと同義語とも言い得る程である。そして何を書くかとかいかに書くかということではなく、書き続けるということ自体が重要になってくるわけである。この場合常に新しいものを生み出さなければいけないという要請は、書き続けることを困難にする。このような事態を打ち破る一つのそして唯一の方法は、ほぼ同じ内容を繰り返し語るということである。そしてそれを可能にするためには、そこで書き表わされる内容が未来に向かうのではなく、まさに現状維持を目的とし、現状維持に満足するものであり、またその現状を獲得するに至った歴史であるべきなのである。この時ブルトンは安心して現実に存在しながら、語る喜び書く喜びに浸ることができる。このようなエクリチュールを可能にするテキストとは、ブルトンによって書かれたシュルレアリスムの小説と言われる『ナジャ』である。『ナジャ』は1928年に発表されているし、『失われた足跡』の中にある「新精神」という一文は『ナジャ』を予告するものとして捉えられ、かつこの『失われた足跡』の刊行が1924年であることを考え併せるなら、コジェーヴのヘーゲル読解がどこまで影響したのかについては決定的ではないと言えるだろう。ただ『ナジャ』については、いわゆるナジャの物語の後に執筆上の中断があること、また1963年には全面的な改訂を行なっていることなどを考え併せると、コジェーヴの影響を指摘することも不可能ではない。この論考においては、ブルトンのテキストにおけるコジェーヴの影響の痕跡を指摘することが目的なのではなく、コジェーヴによって明らかにされたヘーゲルの思想を通してブルトンのテキスト、特に『ナジャ』を分析してみるならば非常に分かりやすい構造になっているということを指摘したいわけである。このことが即コジェーヴの影響ということにはならなくても、ブルトンとコジェーヴが友人同士であり、またコジェーヴのヘーゲル講義をブルトンが聴講していたという事実は一方で存在するわけ

であるから、そこに何らかの共通性を見て取ることは可能であると思う。尚、以上の観点から分析の対象とする『ナジャ』は、1928年に刊行された初版ではなく、34年後の1962年に全面的な改訂をした新版を用いることとする。この新版には、初版にはなかった「遅れた至急便」と題する序言が添えられていて、我々の分析において重要な役割を果たすことになる。

Ⅴ．ブルトンにとっての恋愛

現実を否定するブルトンは、超越的なものを設定しそれとの関わり結び付きによって自己を規定しなければならなくなる。ブルトンは『ナジャ』の冒頭において、「私は誰か」（PI p.647）という問いかけをするとともに次のように書いている。「重要なのは、現世において徐々に自分に発見していく個人的な適性が、私に固有のものであろうが、私には与えられていない一般的な適性の探求から、私の気をそらせることは全くないだろうということだ。私が自分に認める趣味、私が自分に感じる親近性、私が受けている誘惑、私に起こり私にしか起こらない出来事、あらゆる種類のそれらの向こうに、私がされる反応、私だけが感じることになる心の高ぶり、多くのそれらの向こうに、他の人達と比べて、私の差異が何に起因するのかでなくても、何から成っているのか知ろうと努力している。他の全ての人達の中にあって、私が何をしにやって来たのか、そして自分の責任でしかその運命を保証することができないのだから、私はいかなる伝言の使者であるのか私にとって明らかになるのは、私がこの差異を意識するであろうまさにその点においてではないのか」（PI p.648）

そして、これが単に自分の勝手な思い込みではないことを例証するが如く、ブルトンは「私の側のいかなる進め方にも対応することなく、時々私に起こったこと、疑いをかけようもない方法によって私に生じ、私が対象

となっている個人的な恩寵と失寵を私に見せつけていること」（PI pp.652-653）を語るわけである。

しかし恐らくそれは決定的なものではなく、またそれのみによって生きることはできないと思われる。現実に対して超越的であろうとするブルトンは、同時に現実を無視することができないわけであり、この問題を解決するものとして提示されたのが恋愛なのである。ブルトンは『シュルレアリスム第二宣言』において、「私はシュルレアリスムの深遠で本当の隠蔽を望む」（PI p.821）と書き、その注で、その方法について予め疑問に答えるという形で説明を行なっている。この中で『シュルレアリスム革命』誌が催したアンケートの序文として書いたことを再録し、次のように書いている。「もしある観念が今日に至るまであらゆる簡略化の企てから逃れて最大の厭世家達に反抗したように思われるなら、我々はそれは一時的であろうとなかろうと、全ての人を人生（下線原文）という観念と折り合わすことが唯一可能な愛（下線原文）という観念であると思う」（PI p.823）

ブルトンにとってはその内容こそ問題であるだろうが、恋愛は通俗化され、形の上では何ら特殊なものではなくなっている。従ってそれだからこそ、現実に埋没しつつ、その真の意義を問うこともできるわけである。ブルトンが『シュルレアリスム第二宣言』において書いているように、「最も単純なシュルレアリスム的行為は、ピストルを両手で握って、通りに出て、群衆の中でできるだけでたらめに撃つことである」（PI pp.782-783）ということなら、いささか物騒ぎで、もちろん実際に実行されることはないとは言いながらも、それではどうするのかということになると中途半端な形になってしまう。その点恋愛は世間が公認するものであり、また各自の思いも私的なこととして確保されている。ブルトンにとっての隠蔽は恋愛の過程で行なわれるべきものであろうが、恋愛それ自体は「全ての有効な活動の基盤である」（PI p.823）わけであるから、その場を確保するということからも、恋愛が成就された現状の維持

ということが図られなければならない。つまりブルトンにとって、恋愛において超越的になろうとするわけであるが、現実的には恋愛の成就を一つの目的、終着点と捉え、それ以後はそれが破綻しないようにすることが重要なのである。そしてここにおいて、恋愛が成就するまでの様々な出来事が恋愛の成就に向けて収束されるということが可能になる。つまり歴史の成立である。恋愛に関して歴史という言葉を使うことはいささか適当ではないように思われるが、言い方を変えるなら恋愛の成立過程である。またシュルレアリスムが成立するに至る歴史というものは、シュルレアリスム成立以後の発展ということを責務とするため、シュルレアリスムの成立は到達点であると同時に出発点であり、いつまでもシュルレアリスムの成立ということだけに満足しているわけにはいかないのであり、一回性のもの、つまり一旦書かれるとそれで充分ということになってしまう。しかし恋愛について言えば、その内容において超越的であることはシュルレアリスムの立場から求められながらも、現実的には恋愛が成就し、その現状をいかにして維持していくかということが重要である以上、恋愛の成就を到達点とした歴史は何度も語られることを求めるものであり、反復に耐え得るものである。よくアメリカ映画で、父親が子供に対していかにして母親と結婚したかという話を聞かせる場面があり、そしてその話は子供にしてみればもう何回も聞かされた話なのである。現実的には結婚した時の思いがいわば頂点で、それ以後恋愛感情は薄れていくということがあるだろうが、子供が出来て家族が増えていくということを別にすれば、現状維持を何年続けてきたかということが次の段階として問題になるわけである。この恋愛成就という観点からすれば、『ナジャ』の中にあるナジャの物語はむしろその逆である。しかしそれは、一方でブルトンの望む恋愛というものが設定されているからこそ、ブルトンは安心してそれ以前の、ただし結局は今の恋愛に収束されるある一つの出来事を書くことができたのである。何故なら、ブル

トンは『ナジャ』においてナジャの物語の後で、「君」という女性に次のように語りかけているからだ。「最早思い出すことはできないが、偶然のようにこの本の初めを知っていて、私がこの本が＜扉のように開いたり＞して欲しいと思っていたこと、そしてこの扉から私は恐らくいつか君しか入って来るのを見ないだろうということを恐らくは私に思い出させるために、非常に都合よく、非常に激しく、そして非常に効果的に私に介入してきた君、私が君のことを知ったばかりの時、私が君（下線原文）に語りたいという欲望に私もまた従ったのは、この物語なのである。この本の中に入って来るのも出て行くのも、君だけなのである」（PI p.751）

我々が小説や映画で主人公が幾多の困難に出遭い、それを克服していく物語を楽しむことができるのは、最終的にはうまくいくという約束事を信じているからだ。我々は安心してその困難を眺めていることができる。従って最終的に理想の女性に出会い、恋愛を成就するという到達点から過去の恋愛、過去の女性達を語ることができるわけである。ナジャの物語はあくまでその一つの例にすぎないわけである。例えばブルトンが「君」に語りかけているところで、次のような箇所がある。「故意にそうするのではなく、君は私の予感がいくつか形をなしたものと同様に、私にとって最も見慣れた姿に代わった。ナジャは私の予感が形をなしたものだったが、君が私から彼女を隠したのも異存はない。／私の知っている全ては、この人物の置き換えは、何ものも君に置き換わることはできないのだから、君のところで停止するということ、そして私にとってこの謎の連続が終わらなければならなかったのははるか昔から君の前でだったということである」（PI pp.751-752）

あるいはこの箇所よりも前に、既にブルトンは次のように書いているのだ。「私がヴェルサイユからパリまでの道路で自動車を運転していたある晩、実際にはナジャだったが、全く別の女性、それも別の某女性（下

線原文）でさえあり得たのではないかと思うが、私の隣にいた女性は、その時自分の足をアクセルの上にある私の足に押し付け、両手を私の眼の上に置こうとし、終わりのない口づけがもたらす忘却の中で、我々が恐らくは永遠に最早お互いのためにしか存在しないということ、そういうわけで全速力で我々が美しい木々との遭遇に赴くことを望んでいたのだった」（PI p.748）

ブルトンはナジャの生き方について、「ここにおいて人は、シュルレアリスム的熱望の終着点、その最も強烈な限界の観念（下線原文）に達するのではないか」（PI p.690）と評価しながらも、ナジャをいくらでも置き換え可能な女性の一人と見なし、自らの語りの、自らのエクリチュールの素材として捉えるわけである。これが可能であるのは、理想の女性との恋愛の成就という到達点に至ったからであり、仮に理想の女性に出会いもしなければ、恋愛も成就していないということになれば、ただひたすら未来に期待する他はなくなるのである。しかしだからといって、過去に向かい自らの歴史を形成することは決して後ろ向きの生き方というわけではない。結局は今ある到達点に至ることができるという現状の確認が最後には待っているのだ。従って歴史とは、現実に満足し現状を一つの到達点と見なす者によって書かれるということが言えるだろう。もし現状に満足していなければ、過去そして現在の状況をどのように捉えどのように評価していいか分からないからである。従ってブルトンが『ナジャ』を書いた、そして1962年には多少手を加えて改訂版を出したということは、この時期における理想の女性の存在を逆に示唆していると考えることができるわけである。

Ⅵ．弁証法的に可能になる唯一の愛

『ナジャ』については当初、まさにナジャについてのみ書かれるべきものであったと思われる。『失われた足跡』の中の「新精神」には、ナジャ

を連想させる女性の存在が示されているし、そのような女性についてはまさにシュルレアリスム的という形容が適当であり、エクリチュールの素材になりやすかったと思われる。またマルグリット・ボネの指摘にあるように、『ナジャ』は実在した女性とのやりとりをそのままテキストの中に生かすという方法もとられていて、『ナジャ』の序言にあるように、「＜ありのままに受け取られた＞資料を全く損なわないように気を配るこの決意は、ナジャという人物に対してと同様に、ここでは第三者並びに私自身にも適用されているということを、人は途中で見て取るだろう」（PI pp.645-646）というのは、ブルトンの偽らざるところだったのである。ところがこれだけではナジャはシュルレアリスムの精神を体現する女性としてのみ表現されるわけであるが、ナジャの物語の後ブルトンはあたかも結論めいた文章を書き加えることによってナジャをたくさんいる女性のうちの一人にしてしまう。もちろんこれは当初から予定されていたことではなく、『ナジャ』を執筆中に起こった新たな恋愛の対象がそうさせたわけである。事実ナジャの物語を書き終えた後中断があり、かつ書き加えられた文章の冒頭部分にはためらいや迷いが見受けられる。「そのために、私は最早、この本の頁をめくると、二頁早く終わったばかりに思われる行とこれらのこの前にある行を分ける間隔にしか強い関心を寄せる勇気がないのだ。非常に短かく、急いでいる読者や別の読者にとってさえ取るに足らないが、私がちゃんと言わなければならないのは、私にとっては並外れて、そしてはかり知れない価値を持つ間隔。私はどのようにして理解してもらえるだろうか。もし私がこの物語を、私が持っていると確信できるであろう、忍耐強くいわば私心のない目で読み返したとするなら、私自身の現在の気持ちに忠実であるためには、この物語の何を残っているようにするのかほとんど分からないのだ。私はそれをどうしても知ろうとは思わないのだ」（PI pp.745-746）

ブルトンにとって大事なのは、その当時新たに生じた恋愛のことで、

エクリチュールの対象がナジャであるとは言いながらも、新たな恋愛の前と後とではナジャに対する捉え方が明らかに違うのだ。そのあたりのことを考え、冷静に対処しようとしたところから、資料を＜ありのままに受け取られた＞という態度が生じたと思われる。ここにあるのは、新たに生じた恋愛によって構成されている現状を肯定するという態度なのだ。だからこそ、ブルトンは『ナジャ』の最後において唐突に次のように書くのだ。「そこからある態度が必然的に美に関して生じる」（PI p.752）

あまりにも唐突で理解を求めないかのようなこの表現も、既に指摘したコジェーヴの美に対する考えを援用するならば、自ずから理解されることとなる。つまりコジェーヴは次のように書いているのだ。「ところで、もし与えられた（下線原文）現実の過小評価が修道者的態度を特徴付けるとするなら、所与（下線原文）の肯定的な評価は芸術家的態度として典型的である。与えられた（下線原文）［世界］は［悪］と見なされるのをやめるなら、［美］としか見なされざるを得ない」（IH pp.205-206）

現状肯定が美という観念を生じせしめるのであるが、ブルトンに現状肯定という考えをもたらしたこの新しい恋愛は唯一の愛になり得たのだろうか。ブルトンは『通底器』において自らの夢の分析をしているが、その中で解説的覚書として当時の状況も併せて説明している。この中で次のような箇所があるのだ。「1931年という年は私にとって極めて暗い見通しで開けた。気持ちは最悪な状態が続いていたし、この本の第二部である特定の目的のために私が当時の取り乱しのうちのいくつかを説明しなければならない時に、充分にそのことは分かるだろう。Xは最早家にはいなかったし、彼女がいつか家にいることになるというのは最早ありそうなことではなかったが、しかしながら私は長い間彼女をいつまでも引き止めておければいいと思っていた。自分の力をほとんど信じていない私だが、自分の力についてはもしそれがあるとするなら、それは全部彼

女をいつまでも引き止めておくのに役立たなければならないというこの考えを、私は長い間持っていた。私が若かった頃に心に抱いていて、私をよく理解していた人達は、恐らく守ることができる以上に、私が死に物狂いの力でもって守ったと言い得るであろう、唯一で、相互的で、全てに逆らって実現可能な愛についてのある考え方について、事情はこのようになっていたのである。この女性について、彼女がどうなったのか、どうなっているのかは最早全く何も知らないということは諦めて受け入れなければならなかった。それは耐え難いことであったし、とんでもないことであった。私は今日このことについて話しているし、私がそれについて話しているこの思いがけないこと、この惨めなこと、この驚異的でどうでもよいことが起こっているということであり、私がそれについて話したということが言われるのだろう。以上で、気持ちについてはもうおしまいだ」（PⅡ pp.120-121）

つまり1928年の段階では唯一の愛と思われたものが、1931年には崩壊していたということであり、このことにより1928年の段階での新しい恋愛もいずれ唯一の愛と思われる恋愛に到達した時点で、いくつかの恋愛のうちの一つとして捉えられる運命にあるということである。これは当初到達点であると思っていたものが実は誤りであったという事実誤認にすぎないということであり、再度別の到達点がいずれ設定されることになるということを意味する。このような到達点を見出すことができれば、つまりは現状を肯定することができるというわけであり、自らの運命について模索していたブルトンにとっても、超越的であることは永遠の課題として完成に至らなくても構わないであろうが、現実的にはある種の満足、安心をもたらすものであったに違いないと思われる。現実においてある面で満足することは、決して現実の否定を放棄することではないのだ。ブルトンは再度唯一の愛の成就ということで『狂気の愛』を書くに至るが、この中でブルトンは次のように書いているのだ。「世界の変革

そしてそれによってとりわけ社会的障害の除去が必要とする手段の行使は別として、唯一の愛というこの観念が神秘主義的態度から生じることを確信するのは恐らく無駄ではあるまい――このことは、それが今の社会によってどうとでも解釈できる目的に合うように手を加えられているということと両立しないわけではない。しかしながら私は、この観念とその否定の可能な総合を漠然と理解していると思う」(PⅡ p.677)

つまりある時点において唯一の愛と思われたものは、たとえその後において唯一の愛ではないということが判明しても、後には唯一の愛に至ることが可能な弁証法の中にいる。唯一の愛が実現されなくても、いずれは唯一の愛に至ることが弁証法的に可能なのである。コジェーヴは次のように説明する。「自分自身の、つまり［言説］による［現実］と［存在］の段階的な明示――＜弁証法的運動＞においてそれによって存在と現実を明らかにする［言説］を生み出す［存在］と［現実］の適切で完全な理解である終着点にこのように最終的には到達することによって、［認識］が自分自身の誕生に立ち合い、自分自身の進化をじっくりと見つめるのは、［現実］のこの＜弁証法的運動＞を理解することによってである」(IH pp.450-451)

唯一の愛とは突然外からもたらされるものではなく、それを求め続ける中において弁証法的に作用し達成されるものである。唯一の愛を明らかにするエクリチュールも可能であろうが、唯一の愛を到達点としてそこに至る数々の恋愛を書くことが可能である。それはただ単にエクリチュールの素材を提供するだけではなく、またその内容も恋愛に留まることなく、自らの唯一の愛を求める努力とともに運命の作用というものを無視することなく捉えることができるわけである。超越的であることは、この運命を意識することによって可能になると思われる。このように弁証法的に捉えた唯一の愛を『狂気の愛』のテキストにおいてブルトンが書いたのが1937年であり、コジェーヴが高等研究学院でヘーゲルの講義

をしたのが1933年から1939年までということを考え併せるなら、『ナジャ』には見られなかった愛に関しての弁証法的捉え方が見られるのは、少なからずコジェーヴの影響が出ているのではないかと思われる。しかしブルトンのテキストの中にコジェーヴ的考えを影響のあるなしに関わらず見て取るならば、目的が達成されたところを一つの到達点としてそこから過去を振り返り、弁証法的にそれまでの事柄をまとめ、到達点へと収束させるという歴史の観念であると言えるだろう。

注

各引用箇所の後にある括弧の中の略記号は以下の文献を表す。また、頁数はその該当部分を示している。尚、引用文は全て筆者が訳出した。

（PI）André BRETON, *Œuvres complètes I*, Pléiade, 1988

（PⅡ）André BRETON, *Œuvres complètes Ⅱ*, Pléiade, 1992

（PⅢ）André BRETON, *Œuvres complètes Ⅲ*, Pléiade, 1999

（SP）André BRETON, *Le surréalisme et la peinture*, Gallimard, 1965

（PS）Ferdinand ALQUIÉ, *Philosophie du surréalisme*, Flammarion, 1977

（IH）Alexandre KOJÈVE, *Introduction à la lecture de Hegel*, Gallimard, 2000